

かえるの王さま

DER FROSKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫

むかしむかし、たれのどんなのぞみでも、おもうようになつたときのことでございます。

あるところに、ひとりの王さまがありました。その王さまには、うつくしいおひめさまが、たくさんありました。そのなかでも、いちばん下のおひめさまは、それはそれはうつくしい方で、世の中のことは、なんでも、見て知っていらつしやるお日さまでさえ、まいにちてらしてみても、そのたんびにびっくりなさるほどでした。さて、この王さまのお城のちかくに、こんもりふかくしげった

森があつて、その森のなかに一本あるふるいぼだいじゆの木の下に、きれいな泉が、こんこんとふきだしていました。あつい夏の日ざかりに、おひめさまは、よくその森へ出かけて行って、泉のそばにこしをおろしてやすみました。そして、たいくつすると、金のまりを出して、それをたかくなげては、手でうけとったりして、それをなによりおもしろいあそびにしていました。

ある日、おひめさまは、この森にきて、いつものようにすきなまりなげをして、あそんでいるうち、ついまりが手からそれ落ちて、泉のなかへころころ、ころげこんでしまいました。おひめさまはびっくりして、そのまりのゆくえをながめていましたが、まりは水のなかにしずんだまま、わからなくなっていました。

泉はとてもふかくて、のぞいてもものぞいても、底はみえませぬ。

おひめさまは、かなしくなつて泣きだしました。するうちに、だんだん大きな声になつて、おんおん泣きつづけるうち、じぶんでじぶんをどうしていいか、わからなくなつてしまいました。

おひめさまが、そんなふう泣きかなしんでいますと、どこからか、こうおひめさまによびかける声がありました。

「おひめさま。どうなすつたの、おひめさま。そんなに泣くと、石だつて、おかわいそうだと泣きますよ。」

おや、とおもつて、おひめさまは、声のするほうをみまわしました。そこに、一ぴきのかえるが、ぶよぶよふくれて、いやらしいあたまを水のなかからつきだして、こちらをみていました。

「ああ、水のなかのぬるぬるぴっちやりさん、おまえだったの、いま、なにかいったのは。」と、おひめさまは、なみだをふきながらいいました。「あたしの泣いているのはね、金のまりを泉のなかにおとしてしまったからよ。」

「もう泣かないでいらつしやい。わたしがいいようにしてあげますからね。」

「じゃあ、まりをみつけてくれるっていうの。」

「ええ、みつけてあげましょう。でも、まりをみつけて来てあげたら、なにをおれいにくださいますか。」

「かわいいかえるさん。」と、おひめさまはいいました。「おまえのほしいものなら、なんでもあげてよ。あたしのきているきも

のでも、光るしんじゅでも、きれいな宝^{ほう}石^{せき}でも、それから金のかんむりでも。」

「いいえ、わたしはそんなものがほしくはないのです。けれど、もしかあなたがわたしをかわいがってくださいって、わたしをいつもおともだちにして、あなたのテーブルのわきにすわらせてくださいって、あなたの金のお皿から、なんでもたべて、あなたのちいさいおさかずきで、お酒をのましていただいて、よるになったら、あなたのかわいらしいお床^{とこ}のそばで、ねむってよいとおっしゃるなら、わたしは水のなかから、金のまりをみつけてきてあげましょう。」と、かえるはいいました。

「ええ、いいわ、いいわ。金のまりをとってきてくれさえすれば、

おまえのいうとおり、なんでもやくそくしてあげるわ。」と、おひめさまはこたえました。そういいながら、心の中では、（かえるのくせに、にんげんのなかま入りしようなんて、ほんとうにずうずうしい、おばかさんだわ）と、おもっていました。

かえるは、でも、やくそく約束のとおり、水のなかにもぐって行きました。しばらくすると、ちゃんと金のまりを口にくわえて、ぴよこんとうかび上がって来ました。そして、

「さあ、ひろってきましたよ。」

そういって、草のなかにまりをおきました。ところが、おひめさまは、そのまりをつかむなり、ありがとうともいわず、とんでかえって行きました。

かえるは大声をあげて、

「まっつてください、まっつてください。」といいました。「わたしもいっしょにつれてつて。わたしはそんなにかけられない。」

けれど、かえるが、うしろでいくらぎやあ、ぎやあ、大きな声でわめいたつて、なんのたしにもなりません。おひめさまは、てんでそんなものは耳にもはいらぬのか、とツとツとうちのほうへかけだして行ってしまつて、かえるのことなんか、きれいにわすれていました。

かえるは、しかたがないので、すごすご、もとの泉のなかへもぐって行きました。

二

そのあくる日のことでした。

おひめさまが、王さまや、のこらずのごけらい衆しゅうといっしよに、食事のテーブルにむかつて、金のお皿でごちそうをたべていますと、そとでたれかが、ぴっちやり、ぴっちやり、大理石のかいだんを上がってくる音がしました。そして、上まで上がってしまうと、戸をとんとんたたいて、

「王さまのおひめさま、いちばん下のおむすめご、どうぞこの戸をあけてください。」という声がしました。

おひめさまは立ち上がって行って、たれかしらみようとおもつ

て、戸をあけますと、そこに、きのうのかえるが、ぺっちやりすわっていました。

おひめさまは、ぎよつとして、ばたんと戸をしめるなり、知らん顔で席にもどりました。でも心配で心配でたまりません。おひめさまが胸をどきどきさせているのを、王さまはちゃんと見ておいで、

「ひいさん、なにをびくびくしておいでだい。戸のそとに、大おおに入ゆうどう道の鬼が来て、おまえをさらって行こうとでもしているのかい。」とたずねました。

「あら、ちがうの。」と、おひめさまはこたえました。「大入道の鬼なんかじゃないわ。でも、きみのわるいかえるが来て。」

「そのかえるが、おまいにどうしようというのだね。」

「あの、おとうさま、それはこういうわけなのよ。あたし、きのう、いつもの森の泉のところであそんでいましたらね、金もまりが水のなかにころげおちました。それであたしが泣いていると、かえるが出てきて、まりをとつてくれましたの。それから、かえるがしつっこくたのむもんだから、じゃあお友だちにしてあげるとて、あたしかえるに約束やくそくしてしまいました。まさか、かえるが水のなかから、のこのこやってこようとは、おもわなかったんですもの。それが、あのとおりにやって来て、なかへ入れてくれて、というんですもの。」

そのとき、またろうかの戸をとんとたたたく音がしました。そ

うして、大きな声でよびました。

いちばん下の おひめさま、

あけてください たのみます。

つめたい泉の わくそばで、

きのう やくそく したことを、

あなたは おぼえて いるでしょう。

いちばん下の おひめさま、

あけてください たのみます。

すると王さまはいいました。

「それはおまえがいけないね。いちどやくそくしたことは、きつとそのとおりにしなければなりません。さあ、はやく行って、あけておやり。」

おひめさまはしぶしぶ立って、戸をあけました。とたんに、かえるはぴよこんととびこんで来て、それから、おひめさまのあとについて、ひよこひよこ、いすの所までやってきました。

かえるは、そこにしやがみこんで、上をみながら、

「わたしも、そのいすに上げてください。」といいました。おひめさまがもじもじしていると、おとうさまがまた、かえるのいうとおりにしておやりといいました。

おひめさまはしかたなく、かえるをいすにのせてやりました。

するとかえるがまたいいました。

「どうぞ、わたしを、テーブルの上のせてください。」

おひめさまが、かえるをテーブルにのせてやると、こんどは、「さあ、その金のお皿をずっとわたしのほうによせてください。そうするとふたりいっしょにたべられるから。」といいました。

おひめさまは、かえるのいうとおりしてやりました。ほんとにかえるが、ぴちやぴちや、さもおいしそうに舌つつみうってたべているそばで、おひめさまは、ひとくちひとくち、のどにつかえるようでした。

かえるはたべるだけたべると、おなかをまえへつきだして、

「ああ、おなかがはって、ねむくなった。おひめさま、さあ、わ

たしをあなたのおへやにつれて行ってください。かわいらしい、あなたのきぬのお床とこのなかで、わたしはゆつくりねむりたい。」

おひめさまは、もうがまんができなくなつて、しくしく泣きだしてしまいました。ほんとに、ぬるぬる、ぴちやぴちや、さわるのもきみのわるいかえるが、おひめさまのきれいなお床とこのなかで、ねむりたいなんていうのですもの、おひめさまがかなしくなるのもむりはありません。

するとまた王さまが、

「泣くことがあるか。たれでも、こまっているとき、たすけてくれたものに、あとで知らん顔するのは、いけないことだよ。」といいました。

おひめさまは、さもきみわるそうに、指のさきでそつとかえるをつまみあげて、上のおへやまでもつて行くと、そつと隅すみつこにおきました。そうして、じぶんだけが、お床にはいつてしましました。

ところが、かえるは、さつそく、のこのこはいだしてきて、「ああくたびれた、くたびれた。はやくゆつくりねむりたい。さあ、そこへ上げてください。でないと、おとうさまにいつけるから。」といいました。

これでおひめさまは、すっかり腹が立ちました。そこでいきなりかえるをつかみ上げて、ありったけのちからで、したたか、壁かべにたたきつけました。

「さあ、これでたんとらくにねむるがいい。ほんとにいやなかえるつたらないよ。」

ところで、どうでしょう。かえるは、ゆかの上にくろげたとたん、もうかえるではなくなつて、世にもうつくしいやさしい目をした王子にかわつていました。

さて、この王子が、おひめさまのおとうさまのおぼしめしで、おひめさまのお友だちでも、おむこさまであることになりました。そのとき、王子はあらためて、じぶんの身の上の話をして、あるわるい魔法まほうつかいの女のためにのろわれて、みにくいかえるの姿にかえられたが、それを泉のなかからたすけだして、もとのにんげんにかえしてくれるものは、この王さまのおひめさまのほかに

なかつたといいました。それで、あしたはもうさつそく、ふたりつれだつて、じぶんの国にかえつて行くつもりだともいいました。

三

それでふたりはゆつくりやすみました。そして、あくる朝、お日さまがにこにこ、ふたりをお起しになるじぶん、八頭とうだての白馬をつけた馬車が、はいつて来ました。どの馬も、あたまに白いだちようのはねをかぶつて、金のくさりをひきずっていました。馬車のうしろには、わかい王さまのごけらいが、しやんと立っていました。これが忠義もののハインリヒでありました。

忠義もののハインリヒは、鉄のたがを三本も胸にまきつけていました。それは、ご主君しゅくんがかえるにされてしまったので、かなしくてかなしくて、いまにも胸がはれつしそうになったので、やっとたがをはめて、おさえていたのです。たいせつな王さまが、もとの姿にかえたので、きようさつそく、八頭だての馬車が、おむかえにきたのです。忠義もののハインリヒは、おふたりを馬車のなかに入れてあげて、じぶんはまた馬車のうしろにしゃんと立ちながら、ご主君のまた世に出たことをおもって、ぞくぞくするほどうれしくてなりませんでした。

さて馬車がすこしはしりだしたとおもうころ、王さまのお耳のうしろで、ぱちり、ぱちり、なにかはじける音がしました。わか

い王さまはそのとき、うしろをふりかえっていいました。

「ハインリヒ、馬車がこわれるぞ。」

「いいえ、いいえ お殿^{との}さま、

あれは馬車では ござんせぬ。

せつしやのむねに はめたたが。

殿さま、げえろにならしやつて、

ぎやあぎやあ、泉でなかしやるで、

はりさけそうな このむねを、

むりにおさえた そのたがが。」

それでも、ぱちり、ぱちり、また二どもはじける音がしました。わかい王さまは、そのたんびに馬車がこわれるのではないかともいきました。けれども、それはやはり、ご主君がにんげんにかえつて、たのしい日をおくられることになったので、ふさがつていたハインリヒのむねが、ひらけたため、胸のたががはれつして、とびちる音でございました。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※原題の「[DER FROSCHKO:NIG ODER DER EISERNE HEINRI
CH]」は、ファイル冒頭ではアクセント符号を略し、「DER FR
OSCHKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH」としました。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の
作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かえるの王さま

DER FROSKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 グリム兄弟 Bruder Grimm

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>